

第55回水戸市芸術祭 文学大会「短歌」の部

1 マシンウォーク（電動ウォーク）なしつつ庭を眺むればミモザ咲き垂る黄金色に 御代田 澄江

2 密やかに訪れ告げる妖精かな春来るらし堅香子の花 天野 仁美

3 宗教に殺戮^{さつりく}つづくは何ゆゑに信仰とは何救ひとはなに 三井 弥生

4 この先はわからないがと笑ひ合ひ三年を約す新聞購読 安蔵 みつよ

5 月日経ち学びのノート捲^{めく}るたび添削の赤さらに輝いて 石川 紀美子

（海野庄一先生忍ぶ）

6 露の葉を杓子代りに水を飲む早朝散歩は恵みの時か 益子 威男

7 六分儀のかたち不思議とつぶやきぬ胎内に海わたし身籠もる 大野 孝

8 卒寿まで生きると夫の言いまする我の散歩に力が入る 佐久間 秀帆

9 バンクシーひよいと来ぬかと水戸の街あまた店舗の壁が泣いてる 加藤木 よういち

10 柚子の木の鋭い棘に不似合な白く可憐な花あまた咲く 大森 勝代

11 半世紀前のヒット曲特集に今夜のうたコン 桜満開 桐原 勝代

12 小学校裏の小さなお稲荷さん怖怖覗いた幼きあの日 田上 尚美

13 白髪 of 夫婦にサツと席譲る彼は彼女の自慢の電車 佐藤 恵美子

14 ゆく雲の風に吹かるるかたちして友とたたずむ塩谷岬に 三條 千恵子

15 続けての喪中に友は兄姉の多きゆえよと遠き眼をする 宮田 泰子

16 子が巢立つ妻と見送る坂上の桜吹雪に息子ふり向く 田口 敏

17 「オーイ」と呼ぶあなたの声に逢いたくて花菜風待つ墓地の歌碑 小森 幸子

18 ママ友もパパ友も共に卒業と孫の卒業三人で行く 大森 幹雄

19 思わずにすってんころり泥だらけ苗は離さず笑うほかなし 田口 すい子

20 ワイシャツの釦締めるに難儀する九十の友の葬儀の朝に 坂場 正具

21 紫陽花の青の冴えゆく雨上がり憂きことひとつ風に託せり 黒澤 玉枝

22 小澤さん献奏曲は届きましたか水戸芸術館は悲しい調べあふれて
げいじゅつかん

(G線上のアリア)

23 藤村を「フジムラ」と読み頬染めし君懐かしむ廃校の窓 鬼澤 京子

24 納豆をぐるぐるぐるとかき混ぜて今日の運勢占うように 石川 萬里子

25 ご機嫌にカラコンつける子の眼には我には見えぬ景色が映る 後藤 由美子

26 たんぽぽのいいまちがいはたんぽぽんころくすぐるわが子のことば 柴沼 幸子

27 月額五百円のサブスクで世界と自分を繋ぎとめてる 菊地 美沙

28 亡き兄に諭され帰る水郡線トンネル出ると街の明かりが 海老原 輝男

29 土木科を卒業しても電気会社今の仕事 聴覚障碍者指導 三浦 桂寿

- 30 新緑のみちのくの旅つれづれのうたの心を思いつゝゆく
谷越 正子
- 31 夫亡くし家売却し神奈川へ涙落して友去り行きし
高野 フク
- 32 菓子舗にはレモンのケーキ並びおり街路樹の風は夏を連れ来る
木村 祥子
- 33 人生の話題になれば焦げてゆくばかりのハラミ二十六歳
矢澤 愛実
- 34 帰り道キジの姿がふと見えるこれがいつもの八郷山崎
長谷川 創太
- 35 葛の花入り乱れて咲く家々常陸太田の見慣れた風景
深澤 仁
- 36 卵焼き長崎出身母作るお弁当の最後に二切れ
山崎 望
- 37 ドライバーリングスリーブコンセント電工試験前日唱える
一澤 大希
- 38 年明けて大地揺らいだ能登半島水戸の夜空は満天の星
山田 蓮太
- 39 小さきを優しく触るは本能か一歳半が兄となりし日
灰原 啓子
- 40 暑き日の広場の水辺にはしゃぐ子ら泥を掬って目を輝かす
海老澤 貴子
- 41 この日ごろ電動自転車乗り熟し遠出もするや八十路の夫は
二宮 不二子
- 42 迷うなと言いついて言いたること深く迷える窓のフラワームーン
小沼 青心
- 43 こんなもりと歩道に育つ鬼アザミ往く人人に眼を見開きて
内堀 恵子